



2008.7.30

151

編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.
plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740 - 7 - 56535
(6号分1,000円)

野幌から夏の便りです



7.20 七つ沼カールのエゾルリソ

暑い夏ですね。お元気でお過ごしでしょうか？忙しく日々を過ごしているうちに7月ももうすぐ終わりです。

7月23日は私の誕生日。家族でささやかに祝いました。病院の検査技師を退職してから6年半。ようやく無職でいることに引け目を感じずにいられる年齢に近づきました。銀河通信も21年目に入り、151号からは初心に返って素朴な通信でありたいと思います。

4月のヒマラヤから始まって、特に7月はハードな山が続きました。ゆっくり本を読んだり、映画を見る時間がなく、目の前の行事をやり遂げなければと走っていた余裕のない1ヶ月でした。

最近のニュースは、何の罪もない人への殺傷事件や、家族間のむごたらしい事件など、なんだか足もとがぐらつくような不安を覚えます。「反貧困」という本にもありましたが、家族や友人や、さまざまな絆が切れている人たちがなんと多いのだろうと思います。銀河通信はお会いしたこともない読者もいますがほとんどが、自然保護の運動や、山の仲間や、市民運動などで出会った人たちです。改めて通信を今まで続けてきて良かったなと思います。読者が財産です。

私はあまり几帳面な性格ではありません。通信を書くという目的がなかったら、本も映画も読みっぱなしの見っぱなし。感動しても心に留めていなかったような気がします。この通信を書くためにもう一度本を読み直したり、映画も場面を思い出す作業がありました。私にとっては自分を見つめ直す大事な時間だったことに気づかされました。

新聞の小さなコラムにシンガーソングライターの女性が、「守りたいのは絆」と書いていたのが心に残りました。若い世代は大変な時代を生きているなあと可哀想になります。先が見えない不安、大学を卒業しても働けるのだろうか？生活できるのか？安心して暮らせる未来であって欲しいです。だからこそまだ学生の息子にも「あなたの存在はとても尊いのよ」「しっかり生きてね」と伝えたいです。ささやかな通信ですが読んで頂くことで人がつながっていく豊かさを共有できたらと思います。



7.19 糠平川に注ぐ四ノ沢で

楽しい山、悲しい山、厳しい山

夕張岳



望岳台から芦別岳を望む

7月3日、快晴。山の仲間8人で夕張岳に登ってきました。平日なので静かな山でした。出会ったのは本州からの9人グループ、東京から一人で歩いている70歳の男性、年配のご夫婦だけでした。

ウラジロナナカマドやカラマツソウが清楚に咲き、ユウパリアズマギクや、ハクサンチドリ、ムシトリスミレ、ウコンウツギが登山道を彩りユウバリソウはもう終わってましたが、ユキバヒゴタイの開花はこれから。次々出会う可

愛い花に励まされて楽しい山歩きでした。

夕張岳は地元のユウパリアコザクラの会が、毎週パトロールをして高山植物を守っています。昨年、私も山終いの時に吹き通しのロープ撤去を手伝いましたが、今年もボランティアで登山道にロープがつけられていました。

望岳台で会った70歳の男性(とても若々しくてとてもそんなお歳には見えませんでした)は日本100名山を歩き終えて、300名山を登っているとのこと。今朝夕張に着いたそうです。北海道の山々を3週間かけて登ると話していました。花の種類も量も多いから北海道の山はいいですとほめられ嬉しかったです。

高山植物パトロールなど、各地で山の自然を守っている仲間がいます。最近、私の所にも盗掘の情報が各地から寄せられています。可憐な高山植物を、いつまでも大事に楽しみたいですね。



7.3 エゾタカネツメクサとユウパリアズマギク

上ホロカメットク山



上ホロカメットク山化物岩直下で

また高齢で足が不自由な方もしっかり現地まで登られた姿に、山の仲間っていいなと感動しました。私もいつか山に登れなくなる日が来るけれど、素敵な山仲間といつまでもつながっていたいなと思いました。

昨年11月23日、私の山の仲間である4人が上ホロカメットク山で雪崩遭難事故で亡くなりました。日本山岳会の追悼集会が7月6日に行われご遺族も含めて63人が現場に向かい、献花し、冥福を祈ると同時に「私たちが安全に登山出来るよう見守ってください」とお願いもしました。

赤茶けた岩肌を目の当たりにして、あの急斜面からすごい勢いで雪崩れた現場に悲しみを新たにしました。

会員は遠く東京や函館、室蘭、帯広などから駆けつけ

旭岳

7月8日、快晴。某登山教室の人たちと旭岳の裾合平まで行きました。丁度お花が見頃。エゾイソツツジ、キバナシャクナゲ、メアカンキンバイ、エゾコザクラ。エゾノツガザクラ、アオノツガザクラ、チングルマ、ミネズオウ等。草原を埋め尽くしているさまは圧巻です。



裾合平分岐手前の雪渓



7.7 裾合平近くのお花畑

エゾノツガザクラとチングルマの大群落

トムラウシ山

東大雪荘に前泊して7月14日、トムラウシに登りました。ひよんな話から岩手県の釜石岳友会の山案内で札幌から4人が参加しました。

私は、パトロールもあるし、メンバーが経験豊かな山岳会なら、ただ後ろから一緒に歩いて行けばいいのかなと気楽に考えていました。大型バスで32人が宿に降り立った時はびっくりしました。バスは短縮路駐車場までは乗り入れできないというし、一時は青くなりましたが、宿と交渉し宿のバスでの送迎を2万円でもらひ、なんとか登ることが出来ました。

午前3時10分、宿からつづら折りの林道をバスで行き短縮登山口を3時40分に出発。登山者は釜石の28人と私たち4人です。

前日の雨で、登山道はぐちゃぐちゃの悪路。その上、笹がかぶっていて歩きにくいことこの上なし。コマドリの沢まで4時間近くもかかり、ここで私たちのチームのT田さんから「このままでは山頂まで行けない、前トムラウシで引き返す班を作ることに」。この時点で9人が抜けました。H川さんが9人を引き受けT田さん、H田さん、私が19人を引っ張って登ることに。

それからスピードを上げて前トムラウシに8時45分着。お花も見頃で素晴らしかったのですが、私は初めてのリーダーで、花を愛でる余裕はなかったです。背中にこんなに視線を感じた登山はなかったです。11時に頂上に着きました。7時間20分でした。コマクサ、チシマキンレイカ、エゾコザクラ、エゾノツガザクラ、イワギキョウ、イワブクロなど、今が最高の見ごろで、釜石の人たちは感激していました。



7.14 登頂できた喜びが伝わってきます！つらかったけど一瞬だけ晴れ間を見せた山頂で釜石岳友会の皆さんと



いつもはもっと少人数で、ゆったり登る登山ばかりでしたので、釜石の19人が頂上まで無事にたどり着いた時はホッとしました。

帰りは、みんなの顔は満足感いっぱい。足取りも軽く4時20分に下山。笹もいつの間にか刈られ、歩きにくかった道もずいぶん乾いていました。

その後、岩手の地震で驚きましたが被害がなかったとの報で安心しました。

幌尻山荘～幌尻岳～七つ沼～戸蔭別岳

今年も日高山脈ファンクラブ主催の幌尻山荘排泄物運搬事業に7月19日～21日までの3日間参加しました。

今回は山荘フォーラムの講師として日本山岳会から研究者として森武昭さん（神奈川工科大学教授）、上幸雄さん（日本トイレ研究所所長）が、また自然保護担当理事である山川陽一さんが参加されたので私も少しでも助けることが出来たらと参加を決めました。

19日は幌尻山荘フォーラムが、前記の研究者に加え北大の船水尚行さん（工学研究科教授）と愛甲哲也さん（北大農学研究科准教授）に私たちと本州からの登山者とで開かれました。

現地のバイオトイレや施設検証で、集水設備の塩ビ管が壊れやすいこと。ドラム缶のサビ対策をしないと飲料水に影響が出る事。メンテナンスも難しい事。バイオトイレは分解が進んでいないために重量が減らない。固液分離の液体が分解が進んでいない等の問題点が指摘されました。私たちが行った日にすでにバイオトイレが使えない状況でした。排泄物汲み下ろしは当分続くことがわかり、バイオトイレを維持管理することの難しさを知りました。



7.19 山荘のトイレ事情を説明する高橋健さん



全日参加は16人。そのうち女性は3人だけなので食事の準備も担当しました。19日の夕飯は平取牛のすき焼きです。翌日のおにぎりの分も含めて32合のご飯を炊きました。すごい！我が家は3人家族。こんなに炊いたのは初めての体験でした。美味しいと言って頂きホッとしました。

20日は4時起きし、うどんの朝食を摂って5時20分、小屋を曇天の中を出発。いきなりの急登だから、体が慣れるまでに少し時間がかかります。やがて小雨に変わりようやく「命の水」に着。ゴミ拾いをするがテッシュなどは少ない。雨が気になりメンバーは黙々と歩を進める。ダケカンバの林が切れる頃、ハイマツと岩

場が変わり、エゾツツジやチシマキンレイカなどが雨に濡れて鮮やかでした。北カールの稜線を進むがガスがかかって戸蔦別も何も見えない。でも一面のお花畑は原始の香りが。きっちり4時間、9時20分に幌尻岳に着きました。

晴れたら日高の山脈が見えるのになあ。雨は止まない。ゆっくり食事する間を惜しんで戸蔦別岳に向かいます。やがて肩を過ぎると七つ沼が見え、こんな深い谷に青々と水をたたえる沼が美しい。七つ沼は氷河に山体を削り取られてできたカール底だという。沼を間仕切っている丘は削られた土砂が堆積したモレーン。何万年もかけてできた自然の不思議さに感動しました。その底に初めて降りました。鹿の足跡がたくさん。テント場にもなっています。ほんの少しの晴れ間から、幌尻岳と戸蔦別岳も見えたのが嬉しかったです。

七つ沼カールからの直登は汗が噴き出すつらい登り。登りきったら快適な稜線歩きで花を楽しみながら戸蔦別岳に13時15分到着。雨はさらに強くなる。足場の悪い岩を落とさないように緊張を強いられながら下山。笹に隠れた登山道の踏み跡をやっとたどって沢に出た時はホッとしました。山荘に16時35分着。登山靴はすっかり雨で中まで濡れている。寒いので全部着替えたけれど、男性陣はそのまま体温で乾かしているのに感心しました。東京から参加の3人は厳しい山に根を上げなかったのはさすがです。北アルプスなど厳しい山を体験しているからでしょう。

下山後の食事の時、「みんな足が速いですね」と言うのと「あなたも速いよ」。毎週の山登りで体力がついたのかなあ。ともかく厳しい山を乗り越えることが出来た達成感を味わいました。

21日はいよいよ最終日。山荘のトイレの排泄物をドラム缶にくみ取り全



稜線から七つ沼を俯瞰する



員で背負って下山するので食事班はカレーの準備。担ぎ下しただけに参加の8人も11時には到着し、28人で総重量370kg。一斗缶28缶、4リットル缶は8缶を全員で担ぎ下ろしました。



東京からいらした日本山岳会会員の皆さんと

糠平川の渡渉は10数回ありました。1ヶ月前に単独行の男性が増水した糠平川で流されて死亡しています。平均で10数kgの一斗缶を背負っているのですから、転んだら大変！私は小さな4リットル缶で充分に重かったです。

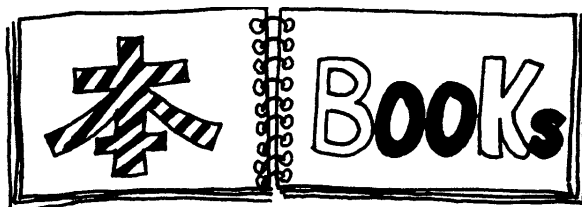
力持ちの山男も山女も素敵に輝いていました。



こんなに深い渡渉もありました

わが夫、チェ・ゲバラ 愛と革命の追憶

アレイダ・マルチ著 後藤政子訳 朝日新聞出版
1900円＋税



チェ・ゲバラ生誕80年。没後40年が過ぎても今だゲバラは、勇敢な革命家としてカリスマ的存在です。

妻であるアレイダ・マルチさん(72歳)が初めて思い出を語ったのが本書です。

それは新しい世代に、シンボルとしてではなく若い頃から夢を抱き、その後創造的な精神をもって夢を実現した人としてゲバラを知って欲しいと序文にあります。

私がゲバラに惹かれたのは映画「モーターサイクル・ダイアリーズ」を見てからです。医学生であったチェがおんぼろバイクで親友と二人で南米大陸を縦断する旅をする物語でした。ちょっと頼りない好奇心あふれるチェが身近に感じました。

キューバの農民の娘として生まれた著者は貧しいながら温かな家庭に育ち、教職を目指す大学に在学中にフィデル・カストロたちの反政府運動に参加。地下活動中にチェ(ゲバラというより親しみが



持てます)と出会います。1959年キューバ革命新政権樹立後、チェの秘書としてチェの仕事をサポート。二人は結婚しますが、新婚間もないのにチェは3ヶ月間、アフリカ、アジア歴訪の旅に出てしまいます。著者は「私も連れて行って欲しい」と頼みますがきっぱりと拒否するチェ。一緒に行けば特権だと思われるというのです。各国からの高価なお土産も受け取らなかったといいます。常により良い世界を夢見てその実現のために全力で闘った人らしいエピソードが語られます。一方家庭的な人でもありました。最初の結婚に失敗し、革命に明け暮れる日々、妻や子どもたちの存在に心安らく姿があります。6年という短い結婚生活で2男2女をもうけ、家族との短い触れ合いをとてても大事にしていたことが、残された家族との写真や手紙から彷彿として来ます。

妻に宛てた旅先からの愛情あふれる手紙に胸打たれます。死を覚悟して書いたであろうコンゴからの手紙には「誕生日に特別のキスを贈ります。何も贈り物はしません。完全に消滅するのがよいからです。君が出窓でポーズをとっている姿が目につきました。一番素敵でした。サンタ・クララの幸せな時代のように。子どもたちの教育を頼みます」と偽名で記されています。ボリビアで処刑される1年前には秘密裏にキューバに帰国。太った老人に変装して子どもたちと過ごすひとときに胸を突かれました。一緒に暮らした年月は短くとも、チェを愛し、4人の幼い子どもたちを育てながら、大学で歴史を学んだ妻。国会議員も長く勤め、現在はチェ・ゲバラ研究センターの所長を務めています。ゲバラの生き方を体現しようと誠実に歩んだ著者の誇りが伝わってきます。

妻に宛てた詩のような手紙は、生涯の宝物と書いています。素朴でおおらかな著者の文章も好感が持てました。



反貧困「すべり台社会」からの脱出湯浅 誠著 岩波新書740円＋税

10数年にわたって日本の貧困の現実と向き合い、そこで苦しむ人々をどう救うか日々腐心してきた著者がその実情と課題、そしてこれからの展望を語ったのが本書です。

第1部「貧困問題の現場から」では日本社会にどうして貧困が広がってしまっているのか、その中でどんな問題が起きているのか等を考察。第2部では「反貧困」の現場から著者はいまの日本社会は「すべり台社会」だといいます。人が困窮状態に直面した時の潜在能力を溜めという言葉で表現しています。

貯金の溜めや、頼れる家族・親族・友人がいる人間関係の溜めであり、自分に何かができると思える精神的な溜めなどがない人は、足を滑らせる

とすぐに貧困に落ちてしまうと指摘しています。

大学を出て、あるいは技能を持っていても就職難の時代です。最近の無差別殺傷事件は安心して暮らしていけない不安が引き起こしている一面もあると思います。

ネットカフェ難民など深刻な貧困の現状は自己責任で片づけてはならないと著者は書きます。著者はそこにある現実を見ることが出来ない、困窮者の生活相談をボランティアで引き受けてきました。仲間と「すべり台社会」に歯止めをかけるべくたすけあいのネットワーク化を進めてもいます。行政がやらないなら自分たちでやろうという気概、行動力が説得力を生み出しています。まずは困窮者に住む家の確保が必要だとなれば、連帯保証人になることも積極的にしているのも驚きでした。住む場所が確保されるだけでは駄目。仲間と語り合う居場所作りもしています。

ボランティアの献身にまかせておいていいのかと弱者に冷たい政治に怒りがこみ上げました。誰もが人間らしく生きることのできる社会に変えて行かなくては考えさせられました。各地で「反貧困」の輪が広がって社会を変える力になればと思います。



組織ジャーナリズムの敗北 続・NHKと朝日新聞

川崎泰資 = 柴田鉄治著 岩波書店 1800円 + 税

朝日新聞とNHKは我が家では最も身近なメディアです。特に新聞は毎日目にする物だし、最近はずっと読む記事が少なくなったと感じるこの頃。両メディアだけの問題ではないとは思いますが、政治や社会にメスを入れるような記事が増えたらと期待をこめて読んだのが本書です。

川崎氏は元NHK政治部記者であり、柴田氏は元朝日新聞社会部記者です。

2001年の従軍慰安婦問題を扱ったNHKの番組改ざんをめくり、朝日対NHKの大喧嘩の内情を徹底的に追求。朝日新聞は政治的圧力に屈し腰砕けになってしまいました。

時のNHK番組製作に関わった永田浩三、長井暁両氏の内部告発で裁判で明らかにしましたが、NHKは本人たちの意に反して製作現場から追い出す報復人事を行ったと言います。その過程から見えてくるのは、政府や政治家、財界などにおもねるNHKや朝日新聞の姿です。他のメディアも同様であると痛烈に批判。

志のある記者がいても、自由闊達に書けない、放送できないというのでは困ります。組織ジャーナリズムの再生はあり得るのか？二人の著者は、記者クラブからの離脱や、テレビ局の系列化の廃止を訴えています。でも長年の習慣を断ち切るというのは大変なことだと思います。

戦前のように権力にすり寄り、チェック機能を喪失していったら日本の未来はどうなるのでしょうか？

私たちメディアの受け手も黙って見過ごしてはいけないのだと思います。

心臓に毛が生えている理由

米原万里著 角川学芸出版 1600円 + 税

一昨年、50代半ばで亡くなった米原万里さんのウイットとユーモアに富んだエッセー集です。本を買うとき装丁に惹かれて買うことがよくあります。題名のインパクトに反してヨーロッパの古都の風景が素敵です。

米原さんの著書は「嘘つきアーニヤの真っ赤な真実」や「オリガ・モリソヴナの反語法」など以前に紹介しましたが、歯切れの良い文章で読みやすい。ロシア語通訳として鍛えたからか曖昧な表現がありません。ことわざを駆使して日本とロシアやヨーロッパとの比較文化論になっていて面白い。

特に印象的だったのが「花より団子か、団子より花か」です。ラーゲリ（強制収容所）での苛酷な体験をガリーナさんが語っています。

少し長いですが紹介します。スターリンによる粛清が最高潮に達した1937年、ガリーナさんはまさに花の盛りの20歳の時にスパイ容疑で逮捕、銃殺された男の妻であった。ただそれだけの理由でラーゲリ（強制収容所）に5年間も閉じ込められます。米原さんは小説「オリガ・モリソヴナの反語法」を書くためにラーゲリに関する資料に目を通しているうち



に女囚たちの手記に心奪われたといいます。何としても彼女たちの傍に行きたくなり、殆どが亡くなっている中で偶然会えたのがガリーナさんでした。彼女はラーゲリ生活で最も辛かったのは一日12時間の苛酷な労働でも、冬季の耐え難い寒さでも、食べるものがないひもじさでもなかったということです。何よりも辛かったのは、本と筆記用具の所持を禁じられていたことだった。そういう状態に置かれ続けた女たちがある日、卓抜なる解決法を見いだす。俳優だったj女囚が「オセロ」の舞台を独りで全役をこなしながら再現するのです。それから毎晩、それぞれの記憶の中にあつた本を補い合いながら楽しむようになった。「戦争と平和」や「白鯨」まで再現し



7.20 幌尻岳のエゾツツジ

たという。娑婆にいた頃、心に刻んだ本が彼女らに生命力を吹き込んだ話です。

団子がなくては生きてはいけないけれど、心の糧はもっと大事なのですね。やっぱりたくさん本を読まなくちゃと改めて思いました。

ことわざが日本だけでなくロシアでも同じような意味に使われていて、生活の知恵に感心しました。

「父の元へ旅立つ母」には批判精神の塊のような人だった母が、最愛の夫を失うと、その精神的打撃が大きく、不安神経症的症状に苦しめられたといいます。「良き夫に恵まれると、失った時の不幸が大きく、悪い夫だと、なくなったときの開放感が大きい」ということわざが浮かんだほどと書いています。

もっと長生きして、今の世の中を毒舌で表現して貰いたかったです。ロシア語の同時通訳者として百戦錬磨の人だもの。

映画

君の涙ドナウに流れ
ハンガリー 1956

ドナウの真珠と呼ばれるブダペスト。1956年、ソ連の衛星国として共産主義政権下にあったハンガリーで市民は自由を求める声を上げました。



「君の涙
ドナウに流れ
ハンガリー1956」

物語は、ハンガリーの失われた革命と、オリンピックの歴史に残る「メルボルンの流血戦」の史実に基づき、自由を求めたヴィキと、水球選手カルチとの歴史に翻弄された恋が描かれます。

自由に生きたいとひたむきに革命をと活動するヴィキ。政治的には距離を置き、スポーツにしか関心のなかったカルチがヴィキと出会って変わっていくのです。ヴィキの両親は反政府活動をしたとして殺されていきました。

聡明で美しいヴィキの権力に屈しない、真っ直ぐな思いに感動しました。人間としての良心に恥じずに生きるとはこういうことなのかと、いつもぐらぐら揺れている私は襟を正す思いで画面に引きつけられました。

ノンポリのカルチがヴィキの愛で変わって行きます。民主化のために武装蜂起し多くの市民が命を失うのです。

一方で、メルボルンオリンピックでは、ハンガリーの水球チームはソ連チームと戦うことになりました。相手チームのさまざまな嫌がらせにも屈せず、ハンガリーは堂々の金メダルをとりまします。ヴィキは秘密警察の大物に「誰が首謀者なのか言え」と迫られますが最期まで自分を貫くのです。その結末に涙を禁じ得なかったです。

ヒトラーの独裁政権下で、ドイツ国民でありながらナチス政権に反旗を翻した「白バラの祈り」のゾフィーの姿とヴィキが重なりました。自由を勝ち取ることがどんなにかけがえのないことなのか、改めて胸に突きつけられた気がしました。

購読料をありがとう 08.5.28~7.22

三浦恵美子(旭川市) 高橋健(日高町) 芳村宗雄(札幌市) 京極紘一(札幌市) 宮本尚(札幌市)
塙とよ子(札幌市) 尾崎弘子(札幌市) さかい廣(札幌市) 片山篤子(札幌市) 前原満之(宮崎市)
森 武昭(狛江市) カンパも含めて 高島拓生(嘉府市) 5,000円 合計23,000円は印刷、送料
に使わせて頂きます。ありがとうございます。

「いま、高山植物が危ない！」

—高山帯におけるシカの食害について考える—
報告書



高山帯のシカの食害が深刻化している。日本山岳会では、被害の調査を始めた。2008年3月、全国の山岳会に調査アンケートを実施した。併せて、同年4月21日、東京・有明でシンポジウムを開催し、食害が深刻化している現状について報告した。食害を止めるための山岳会連帯活動も検討されている。

(2008年7月10日発行)

(社)日本山岳会自然保護委員会

「いま、高山植物が危ない！」

高山帯におけるシカの食害について考える 報告書

日本山岳会自然保護委員会 2008年7月10日発行 非売品

近年、シカの個体数が爆発的に増えた結果、食を求めてシカたちが高山帯まで生息域を広げ、日本各地で被害が広がっています。特に標高3000m峰が連なる南アルプスの被害は深刻になっています。今年4月に開かれた自然保護全国集会での討議をまとめたのが本書です。

北海道でも道東でのシカの食害はよく聞きますが、まだ南アルプスほど深刻ではありません。北岳のホテイアツモリや楡形山のアヤメが絶滅寸前。塩見岳のお花畑からはハクサンイチゲやシナノキンバイが消失との調査報告にショックを受けました。今や盗掘からだけでは高山植物は守れないということがひしと伝わって来ます。

シカが増えた理由はシカの採食地としての植生環境が減少してきたこと。林道が縦横無尽に造られ、草を食べながら登ってきて稜線に達したこと。伐採地の植林によってシカの餌場となったことなど、人間が引き起こしたことを明らかにしています。

シカの生息数を適正にする対策を行わないと貴重な高山植物が危ない！

岐阜県、長野県、静岡県にまたがる南アルプスの現状と尾瀬や中央アルプス、北アルプスにも広がっているシカの食害の報告書です。

非売品ですが欲しい方がいらっしゃれば取り寄せます。



芥川龍之介の手紙

6月に自然保護委員会の会議があり上京しました。6月22日最終日に山梨県立文学館を訪ねることが出来ました。館長の近藤信行さんは日本山岳会の会員ですし、自然保護委員会の会報を編集しておられる妻の近藤緑さんのお誘いで実現しました。

芥川龍之介の短編小説は愛読していましたし、知られざる快活な学生時代の写真や手紙が展示されていて、楽しかったです。

親友、恒藤恭は学問の自由を求めて京大教授を辞した人として有名です。素晴らしい文学館でした。



7.21 幌尻山荘の排泄物を背負って糠平川を渡渉するのも大変！

2008年(平成20年)6月18日(水曜日)

北海道新聞(夕刊)

文化



主婦が20年かけ
個人誌150号達成



日本山岳会道支部自然保護委員長を務める主婦樋口みな子さん(60)の写真、江別市野幌若葉町IIが、隔月で発行している個人誌「銀河通信」が五月二十五日付号で一五〇号に達した。一九八八年七月創刊から二十年続いたことになる。

銀河通信は、A4判八頁、子育てのエピソードなど家族の話題をつづった通信を二千部ほど作って友人や知人に配っていた。次回の目標は一八〇号。さらに内容を深めたいとも、樋口さん方は「アクセス01 1・3882・9020」。

現在では登山の山行報告と、趣味の読書、映画鑑賞を生かした評論が記事の大きな柱。年間購読料千円で百八十人に郵送しているほか、メールで無料配信している読者も約八十人いる。

一五〇号には、日本山岳会が四月から五月にかけて実施したヒマラヤ環境調査隊に参加しての体験記を掲載した。樋口さんは「気候温暖化で氷河湖決壊の危険が増しているにもかかわらず、現地の村人はどの人も「神様が守ってくれる」と口をそろえたのには驚いた」と話している。

人に配ったのが始まりで、その後「長男が成長して家庭内のことを書かれるのを嫌がるようになり、目を環境や平和問題などに転じるようになった」という。